

# コロナ禍における対人援助職の オンラインを用いたネットワーク形成とその可能性

The possibility of online networking for social workers under the influence of  
COVID-19

千葉 晃央

Akio Chiba

京都光華女子大学

Kyoto Koka Women's University

Keywords: 対人援助職 ネットワーク オンラインミーティング

## 目的

コロナ禍におけるオンラインを用いた支援者ネットワーク形成の在り方について、筆者自身の取り組みをまとめ、参加者のインタビューに基づいて考察する。目的は、パンデミック状況における支援者支援に関する実践報告、さらに支援者間のネットワークの形成を目的とした継続性のあるオンラインミーティングについてインタビュー調査によってその成果を明らかにすることである。

## 方法

筆者は、地域の対人援助職を応援することを目的にした「家族をテーマにした事例検討会」を20年以上継続し208回開催してきた。参加者は関西を中心とした対人援助職者等であった。コロナ禍を受けて、会をオンライン形式とし、目的を支援者のネットワーク形成とし12回行った。内容は参加者全員が一人ずつ「最近、自分の周辺であったこと」を持ち寄り、それを一人ずつ話し、その話す機会を1巡後にもう1巡、合計2巡行った。その参加者7名に半構造化面接で4つの質問をし、その成果を検証した。

## 結果

コロナ禍に開催する意味として「喪失体験への対処」「コロナ禍での被災体験の共有ができる」「定期的な機会を持ちたい」他があった。支援的な意味として「適切なプログラム」「自分の可能性を幅広く持

つための自己投資」「生活の中での楽しみ」「モチベーションアップ」「学ぶために必要な適正な負荷」他が語られた。そしてオンライン形式に関して「参加可能性の拡大」「オンラインによる信頼感の増幅と排他性」「募集人数の少なさによる躊躇」が語られた。

## 考察

1つは話すことで自己理解が進み、話したことを受け止められた経験、他者の話からもたらされる現状理解という3段階の過程が循環的に起こっていた。2つはプライベート空間でつながるオンラインにより、リラックスした雰囲気があり、自己開示も進み、信頼を得やすかったという親密性の形成が見られた。また、ネガティブ・ケイパビリティ（性急な答えを出さないような対応力の必要性への気づき）という価値観を支援者が得ることにつながったのではないかという意見も示された。リフレッシュになった、会うのが楽しみなどコロナ禍の生活の支えとなり、支援者の賦活化、つながりの形成も促されたことが一定明らかになった。

## 引用文献

帯木蓬生 (2017)「ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力」 朝日新聞出版 52.141.

村本邦子 (2021)「周辺からの記憶－三・一一の証人となった十年」 国書刊行会 15-17. 他